
ぽけたん

4 & 4 K

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ぼけたん

【Nコード】

N7721D

【作者名】

4&4K

【あらすじ】

アメリカ帰りのミリタリーオタクの少年、桐岡啓二（英検三級）と、ずーっとぼけぼけしている少女、早坂美緒（睡眠は快樂）の推理物語。料理教室に乗り込んだ二人の前で、殺人事件が起こる。注：コナンで似た話があるとよく言われます。大変失礼しました。

アメリカ帰りのミリオタ（前書き）

昔に書いたものをちよこつと書き換えて投稿したものです。事件発
生まで日常をご覧ください。

ぼけたん

アメリカ帰りのミリオタ

僕は桐岡啓二。

普通の高校生ではちょっと体験できない体験をいろいろとしている。

思えば小学校二年生のころから、父親の都合でアメリカに行つて日本人学校に通っていたから、大多数の中で授業を受けるのはかなり久しぶりのことになる。

アメリカでは、友人になつた日本語ペラペラのハイテンションなおじさん（もちろんアメリカン）がいたから、会話に困る事は少なかった。

それに、森の中でリスとか鳥とか撃つて、狩りを楽しんだ事もあった。普通の高校生じゃ味わえない感覚。銃を撃つた事のある高校生なんて、この日本じゃそうはいないだろう。

別に犯罪者じゃないよ？

高校二年生の春がやってきた。僕が日本に帰ってきてから初めての春休みが終わった。秋に転入した時、先生がわざわざ「アメリカにいた」といつてしまったため、僕の第一印象は『英語ペラペラの日本人』という感じだった。悪いが人並みだ。僕自身はほとんど向こうで英語を話さなかったし、日本人の学校に通っていたから、アメリカ史より日本史やっているし。

そんなこんなで、アメリカ帰りにもかかわらず英検三級レベルの僕は、当初久しぶりの日本にちょっと感慨深くなつてしまったのだ。こっちにきて驚いたのは、ハンバーガーとかのサイズが恐ろしいほど小さいと感じた事。もちろんもとはこっちにいたから、向こうに行ったときには逆に大きいと驚いたけどね。でも慣れてしまった

せいか、これでみんな満足できるのか？ と本気で疑問に思ったくらいだ。

まあ、それはどうでもいいんだ。僕がアメリカに住んでいたことはわかってもらえたと思う。だから何？ まあ、ぶっちゃけて言うのと、アメリカにいた日本人は英語ペラペラとは限らないということ。アメリカ人に囲まれて育っても、小学二年生は日本に染まりすぎているから、何を話しているのかさっぱりで、確かに学校でも英語やったけど、別にできないからって苦労しなかった。通訳いたからね。

フランクおじさん。……今何しているのかな。

陽気なアメリカンのフランクおじさんは、僕に射撃の才能があると言ってくれた。あと二年くらい練習すればオリンピックに出られるくらいになる、と。惜しい。あと二年練習できないのが惜しい。

今の僕は、実銃を触れないから、我慢してトイガンを弄っている。駄目だ、満足できない。毎朝毎朝握って撃っているけど、こんなじゃない。あの腕にガクンとくる強い反動と空薬莖が飛び出す快感。火薬の匂い。すべてがない！

「このニセモノがー！」

思わず叩きつけそうになったが、一万円以上したガスガンを床にたたきつけるのは勿体無い。そこでベッドに方向転換！ ぼふつと布団の海に埋もれたガスガンは、軽く跳ねて床に落ちた。

一瞬焦ったが、ダメージは軽微。壊れてはいないはず。

「実銃そっくりの反動があれば、絶対売れるのになあ……」
トイガンメーカーに文句をぶつける、登校時間一〇分前のことだった。

「今夜付き合ってください」

新学期が始まる。

去年は一年、あまりいい思い出がなかった。悪い思い出もなかった。ただなんとなく過ごしていた。でも転入して二日目、クラスメイトにとんでもない人がいることを知ったんだけどね。

思い出すと疲れてきた。

僕は斜め下を見ながら、とぼとぼと歩を進める。昨日の夜中、フランクおじさんが訓練の愚痴を言っていた（メールで）。でも僕からすれば羨ましい事だ。おじさんは日本語ができるだけでなく、アメリカ陸軍のレインジャー部隊にいるのだ。羨ましい。雑務に時間を潰される事なく、崖を登ったりへりから降りたり、銃を撃ちまくったりできるのだ。いずれはデルタ（シールに並ぶアメリカ最強部隊）の選抜資格を受けて、最強の男になると豪語していた。

是非ともデルタになってください、と本気で思う。そうすれば、おじさんが僕に教えてくれることが増える。でも現役のデルタは自分のことを話しちゃいけないから、退役してからかな。

大好きなおじさんはサバイバル技術をいっぱい教えてくれた。向こうにいる間、おじさんが暇な時は学校を休んでも森に行って、ナイフの投げ方や人の投げ方も教わった。

あと、ボールペンを武器にする方法も教わった。木の板程度なら投げて刺さる。おじさんはリングをボールペンでズバーンと射抜いたことがある。僕もかなり練習して、やっとそれくらいの実力がついた。五メートルくらいなら八割方当てられるくらいに。

おじさんは、「男つてのは、好きな女を守るようでなければ、男じゃないのさ」と、二八歳独身で言っていた。おじさんの素敵な魅力がアメリカの女にはわからないんだね！

たぶん、おじさんが僕にそういった技を教えてくれたのは、僕がいざというときに好きな人を守るようにということなのだと思う。

おじさんを思い出すと、アメリカに戻りたいなあ、とついつい思っ
てしまう。でもここは日本だ。ぼくの言葉が通じる事以外メリッ
トはない。

早朝から物思いにふける僕。

ふと、前方に軽くウェーブのかかったロングヘアーの少女の姿。
ゆっくり歩く彼女は、僕が普通に歩いているペースの半分程度の早
さだ。もつとも、これが彼女の普通である。

僕と同じ学校の学生服を着たこの少女の名は、早坂美緒。

一年生の時同じクラスで、忘れようにも忘れられない存在だ。

「あゝ、桐岡君ではないですかあ」

ぼけぼけでのんびりとした口調で、彼女は僕の名前を呼ぶ。相変
わらず眠たくなるような声だなあ、と思ったことは秘密だ。かなり
語尾を延ばして喋るので、スローモーションの会話を聞いているよ
うな印象を覚える。

「お久しぶりですね」

「ああ、うん、そうだね。じゃあお先に！」

僕はしゅたつと手をあげて彼女に別れを告げる。しかし手を伸ば
せば届く距離にいた僕は、袖をつかまれて逃げる事ができなくなっ
た。

「せつかくですからあ、一緒に行きましょう？」

上目使いの彼女は、見た限りでは間違いなく美少女だ。目つきも
鋭くなく、いつも眠そうにとろんとしているタレ目の少女。しかし、
僕は転入初日のLHRで、いきなり彼女の世話を押し付けられたの
だ。

ぶつちやけ『早坂美緒係』である。

「ねえ？ 行きましょうよあ」

両手で袖を掴み、規則正しく腕が振られている。仕方ないので一
緒に行く事にした。

傍目からみれば、恋人と一緒に登校みたいに見えるかもしれない。
だが僕らはキスすらしたことがないし、何も恋人イベントを行って

いない。デートみたいなことはしたことがあるが、思いつきり疲れて帰ってくる。

そりゃあ……楽しいと思ったりはするよ？ 男の子だし。

不意に、彼女が小さく声を漏らし、こちらに顔を向けた。

「今日の八時頃、お暇ですかあ？」

相変わらず僕の袖を掴んだまま、彼女は上目使いに尋ねてくる。

くっ、狙ってこういう『おねだり』をしているわけではないから強い。天然者は強い！ しかも夜だぞ、八時って！ なんだかドキドキするじゃないか！

さらに微妙に瞳が潤んでいる！ ああっ、ここで否定できるやつは男じゃない！

「暇だけど？」

「よかつたあゝ。じゃあ付き合ってください」

「えっ!？」

一瞬、脳の中で「付き合ってください」の意味を検索した。ああ、そうか。そういう意味じゃないんだ。少し残念。

学校に到着し、昇降口に張られているクラス表を見る。僕はすぐに自分の名前を見つけ、そしてすぐに彼女の名前も見つけた。うっ、なんでこんなことに……。

そのとき、後ろからドタドタドタと騒がしい足音を轟かせながら、僕たちに接近する一人の少女。ああ、こいつか。またしても疲れる少女の相手をしなくてはいけないのが悔やまれる。

「おおっ、おおーっ！ クラス表が張られている！ あたしはどうかなく？」

三つ編みの少女の名は、僕らと同級生の皆川亜矢子。備考欄には『常にハイテンションな変人』と書かせていただく。

彼女はぎゅっつと背後から美緒に抱きつき、クラス表を見た。

「あゝん。また二人と別クラスだゝ！」

亜矢子はがっくりと肩を落とす。『二人』と言ったが、本当は僕

なんておまけで、本命は美緒だ。そして僕は、

「一緒のクラスですね」

「うん、そうだね……」

ああ、見ただけで疲れる。

また一年間疲れるに違いない。いや、まだ望みはある！ 今年はその彼女に関わらない係や委員会に入ればいいのだ！ 楽勝さ。

「さて、ここでみんなのアイドル早坂美緒と二回同じクラスになった幸せ者にインタビューしてみたいと思います！」

亜矢子が鞆の中から収録用マイク（あのカセットテープとかついてるやつね）を取り出し、僕に向けた。

「クラス代わろうか？」

「『魁！ イカレ校内新聞部』のマイクには本音をぶつけてください」

「これが真実だから。あとその名前、何度も言っけど絶対変えたほうがいいと思うよ」

係り決めと料理教室

始業式がおわり、僕は新たなクラスへと入っていく。

LHRは、基本的に委員会や係り決めだ。何でもいいから委員会か係をやっておけば、去年と同じように『早坂美緒係』になったりはしないはずだ。でも彼女に対してのいじめとは受け取られないのだろうか、こんな係があつて。

先生は去年と同じ澤田先生だ。三八歳で既婚者。性別男。

「じゃあ、委員会と係を決めるぞ。その前に……」

先生が申し訳なさそうに僕を見る。何だ、このナイフを突きつけられたように感じる危機感は何だ、先生、僕に何を打ち明けるつもりなんだ！？」

「去年と同じで」

「はあああ！？」

「いや、だつてさあ……。彼女に対して怒りをぶちまけたり、イベントでも遊べるような人はお前くらいしかないんだよ。今まで彼女の世話係をした人は全員途中で諦めたのに、お前は最後までやっていただろう？ それに……」

「それになんですか！？」

「……いや、なんでもない。先生にも理由があるんだ。MI6おつと、上からの圧力が」

「MI6！？ 嘘言わないください！ だいたい、どこが圧力かけてるんです！？ このどこにもありそうな私立学校、東風高校に！」

いつの間にか立っていた僕は、周りのクラスメイト達に「どうどう」となだめられていた。

「嫌ですよ！ だつて美緒、体育の時間になったら図書室で寝てるし、昼休みが終わっても寝過ごしして授業参加しないし、授業中も普通に寝るし、放課後も教室でずっと寝るし！ あとほかにもいっぱい

い……それを全部僕が……！」
「よろしく頼むな。通知表の備考欄にはお前の努力を書いてあげるから」

「進学にも使えないじゃないですか！」

クラスが休み時間にもまさる騒がしさになったとき、教室の扉がすぱーんと開け放たれた。

「二回目の『早坂美緒係』になった感想を！」

亜矢子である。

「別クラスのお前まで来るなあー！ むきいいいつ、みんな敵だあつ！」

暴れる僕を、クラスの肉体派四人が取り押さえた。抵抗しても四人分の力は明らかに僕より上である。数の暴力に僕は屈してしまう。そのときである。

「桐岡君、大変ですね〜」

「お前が言うな！」

他人のようにその光景を眠そうに見ている美緒が言った。

そういうわけで、僕はまたしても彼女のお世話係になったのだ。た。

夜、僕は約束通り美緒と一緒にどこかへ出かけた。着替えるのが面倒だったので、僕は制服のままだ。失礼かなと思っていたら、美緒も同じだった。どうやら下校中に寄り道したカフェで、ずっと眠っていたらしい。夕食は食べてくるなといわれたのでどうするのかという僕の問いに、彼女は「安心なされ」とだけ答えた。何を安心するのだ？

ぼけたん

しばらく歩くと、彼女はある建物へと入っていった。看板をしてみる。高松料理教室と書いてあった。
「料理教室だ」

「そうですね。私はあ、お料理を学ぶんです」

「へえ、料理人にでもなるの？」

「違いますよあ。調理実習の時に、いつも終わらないのでえ……ス
ピードアップをと」

成績のためか。

「作った料理はあ、食べてもいいので、夕食にしましょうね」

彼女の料理を食べた事のある僕としては、あまり気が進まなかつた。彼女は手際が悪い（単純に遅い）のに加え、味覚が普通の人と違うのだ。辛いのが好きである。何でも辛くしたがるのだ。時には甘いのも好き。何でも甘くしたがるのだ。中間は存在しない。激甘か、激辛かだ。

「遠慮したい」

僕はノーといえる日本人だった。勧誘にも引つかからないタイプだ。

「そんなこと言わないでください」

教室の前で、彼女はまた上目使いで目を潤ませた。

くっ、屈さないぞ！僕はノーといえる日本人だ！優柔不断な

……日本人の……典型のようには……！

「ああ、うん。わかったよ」

僕は典型的な日本人だった。

うどん粉と殺人

「はい、今日はケーキを作りますよ〜！」

小さな教室に先生の声が響く。結構若い先生だが、今時の二〇代とは明らかに違ってしている。髪の毛も染めていないし。化粧していないのではないかと思うほど薄い。

透明なビニールの手袋をし、腕を捲くって楽しそうに説明を始める。

教卓から見て、縦二列に並べられた調理台一つ一つが、一人に割り当てられている。

エプロンを来た美緒は、体験教室という形で一番前での参加だった。参加者のほとんどはおばさん（学生は美緒だけ）で、男性は僕一人。気まずい。僕は体験の申し込みをしていないので、後ろで美緒がやる気満々でメモを取り、話を聞いているのをみていた。台は余っけていても、僕の分の材料は用意されていないのである。

先生は彼女一人だけだ。きっとこの人が高松先生なのだろう。説明も慣れたものだった。しかし、美緒のような人間に出会ったことがあるのだろうか。先生の苦労する未来が見えてくるようだ。

「まずはスポンジを作ります」

「せんせえ」

間延びした声が教室に響く。

「そのスポンジは、食べられるのですか？」

嫌がらせに聞こえるかもしれないが、彼女は真面目だ。クラスでの付き合いがある僕にはわかる。

「ケーキの台を、スポンジって言うのよ」

先生は笑顔で美緒に教えてくれた。美緒は納得したように頷き、「ありがとうございます」とお辞儀する。動作の一つ一つがゆっくりで、おばさんの中には明らかに苛立っている者がいた。僕も付き合いがなく、わざとじゃないことがわかっていなければ、同じ態

度を示しただろう。

「そんなことも知らないで来たのかい」

おばさんの咳きが聞こえる。ついつい僕はおばさんに対して、

「知らないで来たらいけませんか？ 教室なんですから」

僕だつてスポンジって言う事くらい知っているが、彼女は本当に知らないのだ。それが悪いというのであれば、日本の教育を改善するしかない。一般常識を教えるレベルにまで。

彼女はお家の事情で、外の世界をあまり知らないのだ。最近までMDを見たことがなかったし、円盤の中身を取り出すとするとするほどに無知だったのだ。

僕とおばさんが睨みあっている間に、説明は進んでいた。

「……それから三〇分ほどオーブンで焼きます。それに平行して生クリームを作っておきましょうね」

僕は美緒の側まで行くと、先生の説明をもう一度繰り返した。美緒は「わかっていきます」と応じる。そして僕は続けて、

「いい？ 辛くしたり、常識以上に甘くしたら駄目だよ」

「ケーキは、甘い物ですよ」

「前にクッキー作ったとき、一つで一気になどが渴いたあの甘さはもう駄目！」

あのとときのクッキーの味を、僕は忘れられない。

彼女お手製のクッキーを食べた。見た目はよかった。店で売っているようなレベルに思える。口に放り込んだ途端、砂糖とフルーツの異常な甘さが広がった。手元にお茶があつてよかった。そうでなければ、顔をゆがめて苦しんでいたに違いない。甘すぎるものを食べて吐き気が込み上げてきたのは、あれが初めてだった。

あの味をケーキで味わいたくはない。

「あ、砂糖を」

「こらあー！ スポンジに何でそんなに砂糖入れるの！？ 二〇〇グラムくらい入ってるじゃん！」

「ああ、つ、ついうっかり。では、中和するために」

「塩は駄目だつっの！ 中和できないで変な味になるからやめなさい！ うわっ！ ちょ、ちょっとそれ『みぞれ』じゃん！ 先生、先生！ この人の調理見てあげてください！ 致命的欠陥があります！ むしろ専属スタッフを派遣してください！」

救いの手を求めて先生の姿を探す。先生は僕のすぐ後ろ、つまり隣の台で指導をしていた。相手はこの中では結構若い、アクセサリーをじゃらじゃら付けた化粧の厚いおばさんだ。

僕の声は先生に聞こえていなかった。先生の表情を見ると、明らかに教卓にいた表情とは違う。このおばさんと何か因縁でもあるのだろうか。

僕がそんなことを考えて、ふと視線を美緒の手元に移す。

「自前のうどん粉を入れるなあああ！」

小麦粉の変わりにうどん粉を入れようとしていた美緒から袋を奪い取る。狙ってやっているのではなく、天然で良くなると勘違いして入れているから困る。躊躇しないのだ。

「せっかく持つてきたのにい………」

口を尖らせて抗議する。

「普通の作り方を覚えてからオリジナルに挑戦しようね」

やんわりと注意した僕は、なんだか疲れたので台の側にある椅子に座った。

もし通知表に『ツッコミ』という項目があつたなら、最高成績を叩きだせる自信がある。

「あら、ごめんなさいね。早坂さん、いかがかしら？」

やっと先生が着てくれた。手際よく指導しながら、美緒のペースに合わせてゆつくりと調理していく。先生も大変だなあ。嫌な顔一つしないよ、さすがプロ。

「これでオーブンに。さあ、先生も作らないとね」

そう言つて、先生も自分の分を作り始めた。あつという間に美緒に追いつき、クリームを作り始める。一方の美緒は、生クリームの中に小麦粉を入れようとしていた。間一髪、腕を掴んでそれを止め

る。

「何やってんの？」

「ええつとお……。ああ、つ、小麦粉はこっちに入れられないんですね。危うく桐岡君の食べるケーキが、粉っぽくなるどころでしたあ。」
「てへっ、と可愛らしく微笑む美緒だが、僕はさーっと血の気が引いた。」

ああ、そっか。これ……。僕が食べるんだっけ？

「最悪でも、飲み物一杯で食べ……」

突然、今日室内の電気が消えた。いや、廊下まで真っ暗だ。暗闇で目がなれていないので、すぐ近くにいますの美緒ですら薄っすらと見える。見ただけでは美緒と判別できないが、近くに居るのは彼女のはずだからそれでわかる。

オープンを動かしすぎて、ブレーカーが落ちたかな？

「危ないからみんなじつとしてください！」

先生の声が響く。美緒はオープンに入れてあるスポンジが心配なようで、手探りでオープンを開けたと触っているらしい音がした。何がしたいのだろうか。無駄だぞ、オープンは動いていない。

「真っ暗ですう」

「動くな美緒。このパターン、なんだか僕が酷い目に遭いそうだ」

「私はあ、何もしませんよお？」

「故意じゃないから対応しきれないんだよ。うわっ、ちょっと！

……。ねえ、脚に生クリームがかかった気がするんだけど」

ボールが落下する音が聞こえ、すぐに靴の隙間からドロドロしたものが入り込んでくる感触があった。美緒は「え？ 何もしてないですよあ」と容疑を否認しているが、お前以外に誰がこんなことをするんだと内心抗議する。

だが、酷い目に遭ったのは僕だけではなかった。近くで呻き声が聞こえたかと思うと、何かが倒れる物音。

「ブレーカー見てきますから！」

先生が教室内を走る音が聞こえる。廊下の扉を開け、学校でやれ

ば注意されるほどのスピードでダッシュ。

そして教室内に光が戻った。一瞬蘇った光に目が痛くなる。

一番前の台で、倒れている人がいる。それを見て、おばさん特有の色気のない女性の悲鳴が教室内に響く。

光の中で、あのじゃらじゃらしたおばさんが死んでいた。

犯人は美緒？

すぐに警察が到着した。こういうパターンは何度か経験している。美緒と関わってから特にそうだ。その前にもアメリカで一度巻き込まれたし、美緒と知り合ってからは何度目だろうか。

決して慣れはしない。唯一の救いは、担当の刑事さんが知り合いということくらいだ。

「お久しぶりですう。中原警部補」

美緒が丁寧に頭を下げた。そう、彼女の前に立っている男は中原警部補。何度か美緒と僕の関わった事件に一緒にいる。探偵ものの物語では、大抵警部がそういう立場にいるが、彼は警部補だ。

「いや、実はね美緒ちゃん。私は警部になったんだよ」
定番の警部になっていた。

「はあ、そうなのですか」

美緒は驚いた顔でゆっくり（彼女では普通に）頷く。

「桐岡君、どちらが偉いのですかあ？」

何を聞くんだ、こいつは。そう思ったが、僕は紳士的に答えてあげる。

「警部だよ」

「そうなのですか。小説ではあ、警部補と警部の会話はあ、あまりないので」

この状況でもマイペースで物事を考えられるのは、彼女の大きな特徴なのだ。実際は動揺しているのかもしれないが、その表情は「宿題を忘れてしまいました」と同レベルの動揺に思える。

警部は死体を見た。心臓をバターナイフで一突きである。警察が来る前に美緒が白い手袋をして死体を簡単に調べていた。……僕は遠くでそれを見ていただけである。

「どうやら、凶器は刺さっているバターナイフだな」

「見ればわかりますう」

美緒が答える。

そして事件の状況を説明し始める。

「突然真っ暗になってえ、そしたら突然殺されたんですう」

「要約しすぎ」

僕が変わりに警部に向かって話す。

「たぶん、九時くらいのことですよ。暗くて目もなれていなかったから、何も見えなかったですけど、呻き声が聞こえて、そのあと何か倒れる音がしました」

「そうか。朝の犯行だったら見えただろうに」

警部が一人で唸っている。そして凶器のバターナイフを見て、よし閃いたと言わんばかりに手を打った。

「そうだ！ このバターナイフは今日の授業で使ったものだ！ これがない人が犯人ではないのか！」

早速、警部は部下に命じて全員の台を調べさせた。そしてバターナイフがなかったのは、

「はううっ、私ですう」

美緒だった。

そんな馬鹿な。美緒は僕と話していたし、オープンをペタペタ触る音も聞こえた。その証拠に、オープン周辺にはクリームがついている。たぶん、美緒の手についたクリームがついたのだろう。

だが、知人が犯人とあつては吊るし上げにくいのか、警部は唸っただけで、美緒には何も言わなかった。

「このままでは、私が犯人なんですう」

美緒が肩を落として俯く。が、すぐに顔をあげて歩き始めた。行き先は、教卓にいる高松先生のところだった。

「せんせえ、顔にクリームがついていますよあ？」

先生ははっとしてそれを拭う。

「ごめんなさい。驚いた時に手を顔につけちゃったから」

「そうですかあ。驚きますよねえ」

美緒も人の死を見て悲しんでいるようだった。うんうんと頷くと、

再び歩き出し、今度は教室を出た。

「ブレーカー、また落ちちゃわないように見てきますね」

ああ、探偵スイッチが入っちゃったみたいだな。美緒の行動を見て僕はそう考えた。いつもはあまり動かない彼女が、自発的に動く事は珍しい。彼女の好きなことは専ら身体を動かさない事だからだ。読書や、寝るといった行動である。

僕も教室を出る。ちらっと先生のほうを見ると、手に結婚指輪が輝いていた。あまり詳しくはないが、綺麗な色をしていた。

「やれやれ。付き合うよ」

僕も彼女の隣に並び、一緒に歩き出す。

人気がなくなり、ブレーカーのある場所までやってきた。倉庫のようになっているその場所は、警察の人が二人ほどいただけだった。彼女は、この人たちとも面識があるようだ。そりゃあ、客観的に見て美少女だし、以前も事件に関わったことがあるから、そういう珍しい人は覚えているだろう。

「ちょっと見せてください。邪魔しませんから」

天然の上目使い&潤んだ瞳で魅惑攻撃。そして「本当はいけないんだからね」と屈した警察の人は、彼女が何をやるのかを注意深く見守っていた。それでいいのか、日本の安全を守る人！だが今回は少し感謝。

「ああ〜っ」

間抜けだが驚いたような声を上げる。ブレーカーの下の床には、水が溜まった跡があった。広範囲に飛び散っている。誰かがすぐに拭いたのだろうが、木造の床はすぐに水を吸って、拭ききれっていなかったようだ。

美緒が倉庫を見回す。使われていない、隅で錆びている水道の蛇口を見つけて、トテトテと駆けて行く。そして蛇口に指をつけた。

「あゝ、なるほどおゝ。へえ〜」

一人で納得し始めた美緒。うんうんと頷き、今度はレバーに触れてみる。

「見てください」

僕と警察の人に行った彼女は、ブレーカーのレバーの上についている白い何かが目立ったところを指差す。

「接着剤だと思います。剥がした跡ですね」

レバーを見せたあと、今度は倉庫を出て、片っ端からゴミ箱を漁り始めた。女子トイレにまで行って、ゴミ箱の中で何かを探す。しかし「ないなあ、ないなあ」と唸っていた。どうやら彼女の予測は裏切られたらしい。

「このままでは、私が犯人なのです」

「それか僕、だよな」

事件発生時、同じ台にいたのはこの僕も、である。

「でも、犯人はあ、高松先生だと思うのです」

探偵物語ではタブーとなっている、推理の途中で犯人を明かす彼女。何を根拠にそう思ったのかを聞こうとしたが、

「……ああ。そうですね、その可能性もありますね」

自分の中で会議でも行っていたのか、唸っていた美緒は突然笑顔を取り戻した。い、意味がわからん。大丈夫か？

「教室に戻りましょう」

自己解決の次に

教室に戻ると、おばさんたちが騒いでいた。いつまで自分たちをここにいさせるのかと、警部に向かって怒鳴っている。ああ、怖い怖い。バーゲンとかで一番力を発揮しそうな連中だ。

警部が一瞬美緒に目で「助けて！」とメッセージを送った。美緒はそれを受け取ったのか、天使のような微笑を浮かべる。警部がほっとしたのも束の間、それだけだった。届いてはいなかったようだ。今度は僕に視線を向ける。僕は「勘弁してくれ」とメッセージを送り、目を背ける。僕のは届いたようだ。

「ちよつとおんた！」

おばさんの一人が僕に向かってきた。なぜに!?

「あんたが犯人じゃないの!? あんた、申し込みしないでいきなり来たじゃない!」

「そうよ刑事さん! こいつが一番怪しいわよ!」

「さつさと逮捕してよ!」

うわあああ、おばさんの攻撃がこっちに向いた! 警部は一瞬安堵の表情を浮かべた。そんな大人を修正したくなかったが、その前に美緒がパンパンと手を叩いて注目を集めた。

手を強くたたきすぎたのか、涙目になっていた。可愛いのだが、今こつという場でやって欲しくはないなあ……。

「せ、静粛に!。みなさん、落ち着いてくださあ!」

場違いな間抜けそうな声が響く。しかしおばさんの怒りは収まらず、その矛先は美緒にまで向いた。

「あんたの彼氏のせいで事件が起こったのよ!」

「はわ!っ! 私の彼氏じゃ……!」

「否定するのそこ!? 違うでしょ!」

頼りにした僕が馬鹿だったのだろうか。そう思ったが、意外な人物が助けてくれた。

「まあ、とりあえず話を聞こうじゃないか！」
今まで外野だった警部である。もしかして、手柄を横取りしたいのか？

そんなわけで、美緒の推理ショーが始まった。

「まず、犯人は高松さんですう〜」
いきなり犯人を指名。

「ど、どうして私か！」

そりゃあ、そう言うよな。僕だってどうして高松さんなのか知らないし。

先生はかなり慌てた様子だが、決して美緒に掴みかかったりはしなかった。おばさんとは大違い。

「動機とかは、全然わかりませんけど〜、あなたしか、できません〜」

ゆっくりと、美緒は高松先生を追い詰めていく。

「こんな夜に、ブレーカーを落とせば、カーテンを締め切っている室内は、目が慣れるまでは、外より真っ暗なのですう」

クイズの説明をするかのように、どこか楽しそうな美緒。だが彼女は喜怒哀楽をちゃんと感じる人間だ。根元から楽しんでいるわけではない。

「あなたはあ〜、真っ暗でも見えるように〜、予め準備していたのですう」

「準備？ そんなことできるんだ」

僕が口を挟むと、美緒は自分の眼を指差した。

「対策方法はいろいろありますよ〜。たとえば夜中に起きても〜、真っ暗な部屋の様子が見えませんか〜？」

「見えるね。ずっと眼を閉じていたから眼が慣れるんだ」

「つまりはそういうことですよ〜」

なるほど、眼を暗い環境に慣らすことで、みんなよりも早く目標を視認でき……あれ？

「ちょっと待った。それじゃあ先生はブレーカーが落ちるタイミングを知ってて、眼を閉じていたってこと？」

「違いますよ」

「……ごめん、もう頭が追いつかないや。僕は割り込まずに美緒の説明を待つことにした。」

「通販でも売ってるじゃないですかあ。綺麗な黒い瞳を作れる……黒のカラーレンズ。カラーレンズの流行こそ遠のきましたが、あれは眼を傷つける可能性が高いのであまりオススメは……」

「いいからいいから、話がそれてる！」

修正してあげる。カラーレンズ流行話になりそうだった。美緒は一回カラーレンズが目が悪いと唐突に僕に訴えてきたことがあり、混乱したのも記憶に新しい。

「失礼しましたあ。ええつとあ、つまりサングラスをかけているのと、同じ効果があるのですう。暗い場所に目が慣れていたのですね」

「それなら、眼を閉じなくても暗闇に眼をならすことが可能だな」
警部が頷く。こいつ、やっぱり自分の手柄にするつもりだな。出世したのも彼女のおかげだってわかっているのか、月に一度くらいレストランで奢っているけど。口止め料だな、あれは。

美緒はわかっていないけど、「いい人ですね」で済ますのだから、彼女はもう少し事件以外で人を疑うことを知るべきだ。

先生がキツと美緒を睨む。

「私が黒いコンタクトをしていた証拠はあるの？」

「ばつちりですう。先生はあの暗い中でも、『走って教室の外に出た』んですう」

これは僕も覚えている。あのときはあまり気にならなかったが、先生の足音はやけに速かった。

「このトリックには、チョメイテキな欠点があるのですう」

「致命的、でしょ」

著名でどうするんだと突っ込みたかったが、時間が惜しいのでや

めておいた。

「そうそう。はあく、桐岡君はヒヤクシキですね」

「それは大尉専用の……ごめん、なんでもない。つづけて」

たぶん、博識と言いたかったのではないだろうか。突然MSの名前が出てきてびっくりした。……これが若さか。

「その欠点とは、自分でもブレーカーが落ちる時間が、正確にわからないことですよ」

彼女は教壇に立ち、ホワイトボードに絵を書き始めた。ブレーカーのようだ。

「ブレーカーのある物置にはあ、あまり使われていない水道の蛇口があつて、濡れていたのですよ」

「だから？　ときどき物置を掃除する時に、水を使うの。不思議じゃないですよ？」

先生の口調が変わった。明らかに美緒を敵対視している。

「濡れている床は、一箇所しかなかったのですよ。『ブレーカーの下』ですよ」

ホワイトボードで丸っこい字で『濡れていました』と書くのは、僕と一緒に見たあの場所だった。

「ブレーカーを落としたトリックを、解説しますね」
みんなに笑顔を向ける美緒。

「ブレーカーにい、丈夫な紐を接着剤でつけて、紐の先に、水を入れるビニール袋を用意しますよ。そのビニール袋を、宙ぶらりんにして、蛇口からホースで、少しずつ水を入れますよ」

彼女はきゅっきゅっきゅとホースを描いてビニール袋につっこんだ。

「時間が経てば、水の重みで、ブレーカーが落ちるのですよ」

そこまで言うと、『落ちる』とブレーカーに矢印が延びた。

「でも誤算がありましたね。ブレーカーが落ちた勢いで、ビニール袋が破けたのか、紐が外れたのですよ。だから床が濡れていたんですよ」

「そんな証拠、あるの？ 私がやったっていう証拠！」

「……せんせえ」

美緒はちよつと悲しそうな眼をしたが、また笑顔を浮かべていった。

「手がお綺麗ですね」

はつとしたのは高松先生だった。

「ブレーカーを戻してから帰ってきた先生には、手袋がなかったのです」

そうだ。もしかしたら、美緒が探していたのは犯行時にしていた手袋……つまり返り血のついた証拠……だったのかもしれない。ブレーカーのトリックで使った道具は、物も小さいしゴミ箱の中に捨てれば目立つ事はない。しかし、

「この殺人は、時間との戦いなのです。目が慣れれば、犯人が見えてしまうのですから、すぐに動かないといけません。だから時間をかけて手袋を外して犯行には、及び難いのです。顔についていたクリームは、レンズを外すときにも手袋をしていたから、ですよ」

美緒の追求に、先生は押し黙った。

「ゴミ箱の中には、接着剤のついた紐と濡れたビニールはあったのです。鑑識の人に渡しました。あとは手袋なのです。探しても見つからなかったのでえ、せんせえが持っているかも……」

そこで彼女は思わぬ行動に出た。なんと、自分から先生に近づいたのである。恐怖心がないのかこの馬鹿は！ そう思って止めようとしたが、既に遅かった。とろい美緒は簡単に先生に捕まると、包丁を眼前に突きつけられた。

「はわあ〜っ！ つ、捕まっちゃいましたあ〜」

「あほ！ 馬鹿！ 間抜け！ どじ！」

僕は美緒に向かって罵声を浴びせた。

「自分が指摘した犯人に捕まる探偵がいるか！」

「私は探偵じゃないです」

「ええい、その緊張感のない声を出すな！」

「声は生まれつきですう〜」

泣きそうなのか余裕なのか、よくわからないぼわぼわした声で、美緒は反論した。

「名推理よ、お嬢ちゃん。でも彼の言う通り、馬鹿ね」

「は、犯人の人にも馬鹿にされてしまいましたあ〜」

誰が見ても馬鹿だろう。彼女はこういう事件を考えたりするのは得意だが、常識的な部分では欠陥があり、間抜けな行動が多い。

「無駄な抵抗はよせ！ これ以上罪を増やしてもどうにもならんぞ！」

警部が銃を抜いて説得する。日本の警察で広く使われているニューナンブが蛍光灯の光であやしく輝く。

日本の警察にしては珍しく、中原警部は銃の携帯許可申請をよく出して現場に乗り込んでいる人間だ。

「あ、あなたには弁護士とあ〜、黙秘権を雇う権利がありますう〜」
「逆だ、逆！ 黙秘権を雇ってもなんにもならないぞ！」

顔には出ていないが、かなり美緒も動揺しているようだ。

「刑事さん、その銃をこつちに寄越しなさい。じゃないと彼女を殺す」

高松先生の声は、随分と冷めていた。初めのころ見せていた優しい表情はここにはない。

中原警部は仕方なく銃を彼女のほうに放った。しかし、ニューナンブは彼女の数メートル前……僕の足元に転がった。彼女は舌打ちし、僕を見る。

「こつちに蹴りなさい」

「蹴るのは暴発の危険があるんだ。流れ弾に当たるのは御免だから、手で拾っていいかな？」

先生は少し考えたが、僕に銃を持たれても脅威にはならないと判断したのだろう。頷いて、もつことを了承してくれた。

「じゃ……拾うよ」

予告してから銃を拾う。僕の中では次に何をするかが決まっていた。

初めて人を撃つ。

撃てば……人を撃てば……美緒を助けられるかもしれない。猟銃以外に拳銃を使った事だつてある。当てられる自信はある。リスよりも標的は大きいのだから。でももし外れたら……。

「渡しなさい」

先生の声が届く。

銃を握る手に汗が流れ込んでくる。

構えろ、構えろ！ 必死になつて腕に命令するが、どこかで拒絶している。腕が上がらない。自信があつても、脳では外れた時のことを考えて、拘束着でも着せられているように動かない。そして、銃を人に向けて撃つということに対しても抵抗があつた。

目をぎゅつと閉じた。意気地なし。どうにかしろ、森で野生動物を撃つていたのを生かせ！

そのとき、近くの台の上に置かれたノートが目に入った。美緒が使っていたやつだ。その上には……！

『男つてのは、好きな女を守るようでなけりや、男じゃないのさ』
僕はゆっくりと銃を床におき、彼女の足元に滑らせた。彼女の目が銃を追う。その隙に、僕はノートの上にあつたものを手にし、背後に隠す。手の中で扱いやすいように向きを変え、チャンスを待った。

「早坂さん、銃を取りなさい」

「い、一般人の銃の所持は禁じられていますう……」

「いいから！」

大きな声で指示され、美緒はゆっくりとした動作で銃を拾おうと腰をかがめた。

チャンスが来た。

高松先生は僕よりも警察連中を見ていた。視界の隅にいる僕にまで注意が及んでいない。僕は一步踏み出し、さっき右手に持ったも

のを投げた。

持ち主を救え！

美緒のボールペン　　！

彼女が気づいた時には遅く、包丁を握っていた甲にボールペンが突き刺さった。痛みで包丁を放す高松先生。それを見た美緒は、銃を持ったまま腕を振り解き、僕のところへと駆けて来る。

美緒の身体を強く抱きとめた。動作がゆっくりな彼女にしては動きが速く、受け止めるのに少し力が入った。

「よし、確保！」

中原警部の指示で、部下が一斉に動いた。

「はあく。助かりましたあ」

美緒が僕の腕の中で顔を上げる。

「ありがとうございます」

「べ、別に。ほら、係の仕事！　うん、そうだ、自分のためだよ！

内申点！」

僕はなんとか誤魔化すと、はっとして美緒を離す。ふわふわしたような女の子の感触が離れると少し寂しかったが、今まで抱きしめていたことを思い出すと、それ以上に恥ずかしくなり、心臓がバクバクと音を立てた。

「う、ごめん！」

「いえいえ」

美緒は笑顔で僕の事を見ていた。

直視できない……なんだか美緒がやけに眩しい。

エピソード

この事件について書かれている新聞では、美緒の活躍は描かれていなかった。ただ、僕の活躍は描かれていた。なんだか恥ずかしい。ニュースにもなつたらしく、世間話の大好きなその場にいたおばさん連中は、「彼は初めて見たときから、他の同年代の少年とは違うオーラがありました」と語っているらしい。

へえ……あれだけ僕を犯人扱いしていたのに。

美緒の活躍が描かれていないのは少し残念だけど、この新聞の記事があれば、大学とかも推薦もらえちゃったりするかな。そんなことを考えて、僕は学校へ向かった。

途中で美緒と遭遇し、昨夜のお礼を述べた。

ケーキが作れなくて残念そうだった。事件があつた直後だから、仕方ないだろう。新聞の記事を切り抜いて美緒に見せると、「桐岡君、格好良かったですよ〜」と褒めてくれた。自分については何も言わない。

記事によると、動機は、殺したおばさんが金を使った汚いやり方で、高松先生の夫と不倫していたというものだった。彼女は、おばさんを殺害してから、自分の夫も殺害し、自分も死ぬつもりだったと話していると言う。

「無駄に……故意に生き物を殺すのは、最低のことです。そんなこと私は認めません」

以前、僕が森で野生動物を撃っていたと話した時も、彼女はそう言っていた。生きるためではなく、殺すために殺すのは、最低なことだと。

だが、そういう彼女は どうして僕を嫌わないのだろうか。

結果として、森で経験して学んだことが彼女を助ける事に繋がった。皮肉なものだ。助ける手段として用いられたボールペンのあの技も、もともと猟の途中で拾得したのだから。

もしかしたら、殺す相手が違うだけで、僕も高松先生も一緒なのではないか。殺したいから殺した。単純に言えばそれだけだ。正当化は……。

「……桐岡君は違いますよお」

「え？」

「桐岡君は、死んだ生き物を無駄にしませんから」

「……ふうん」

口に出ていたのだろうか。でも彼女の言葉で気が楽になった。

猫で死んだ野生動物は、その場に放置したりはしていない。食べてその肉を味わったり、他にも様々な使い道があった。

それだけの違いなのだろうか。彼女の言葉には、もっと深い意味があるように思えた。

「美緒ちゃんーん！」

その大声で、僕の意識は現実へと引き戻される。

わざわざ校門のほうから走ってきたのは、ほかでもない亜矢子だ。「新聞見たよ！ 本当は美緒ちゃんがまた解決したんでしょ！？

詳しい話聞かせてねー！」

そう言えばあの時、フランクおじさんの言葉が思い浮かんだのはなぜだろう……？

エピソード（後書き）

作品を読んでくださりありがとうございます。もしよろしければ点数はいらないので感想だけでもいただけると画面の外で小躍りします。

ぼけたん

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7721d/>

ぼけたん

2009年6月6日13時18分発行